

当日未対応の質問と回答一覧

Q1：全先生方に質問で、・・・ [▶レクチャー担当教員より](#) 1P [▶総長特命教授より](#) 2P

Q2：問芝先生に質問させていただきたいです。・・・ [▶問芝先生より](#) 3P

=====

Q1：全先生方に質問で、今の東北大学の研究で良いと思うところ、逆に改善したほうが良いと思うところを教えてください。

A：レクチャー担当教員より

【問芝】大学全体のことはあまり存じ上げず申し訳ないのですが、少なくとも私の所属する研究室は大変自由な気風で、学生さんはもちろん、私も、とてものびのびと過ごし、好きな研究を好きなようにさせていただいています。本当にありがたい環境です。

改善してほしい点は……敢えて言うとしたら、建物が古く寒いこと、くらいでしょうか。

【吉川】良いところ：研究に必要な高性能機器が非常に充実しているところ。共用で安価に利用できる機器が多く、研究を遂行するうえで欠かせない存在です。

昨今は論文を出すのに高額な APC (Article Processing Charge) がかかりますが、東北大学では APC を補助してくれる有り難い制度があります。

改善したほうが良いところ：医学系研究科では、異分野間・研究室間の交流が少ないこと（臨床業務に従事されている先生方が多く、研究に割ける時間が取れないなどが要因かと思います）。

教育面になりますが、大学院生に留学生が増えているものの、大学院生向けの英語での講義が少ないこと。

【二宮】

色々ありますが、特に良いと感じる事柄は下記の2点です。

1) 若手研究者に対する支援

博士後期課程の学生には生活費の援助が充実しています。また、教員も若手層に対する研究費支援は多数あり、比較的研究に集中しやすい環境なのではないかと感じます。

2) 色々な方々との交流の機会

東北大学は教員も学生も優秀な方々が多いと感じます。ILAS コロキウムでも感じましたが、東北大学の学生さんは賢く意欲的です。研究室の学生からも、毎日多くの刺激を受けます。先生方も優れた成果を発信されている方が多く、東北大学内での交流の機会も多数あります。ワークショップや飲み会等で自分の専門分野外の方々と意見交換できる機会も多くありますので、違った視点から新しい研究を考えるきっかけに恵まれていると思います。

改善した方が良い点については、東北大学に限らないかもしれませんが、少し大きな単位の組織力が海外より劣っていると感じることがあります。

研究室単位で活動することはどの地域でも大きく変わらないと思いますが、それらを束ねたグループでの研究や業務をする場合に、海外の方がより戦略的で、連携が取れているように感じます。逆に言えば、日本の方が個人の自由度は多いのかもしれませんが。

A：総長特命教授より

《河田：当日発言》東北大学だけではなく一般的な話です。今もここで文系と理系の先生方の話を聞いていますけれども、やっぱりまだそのつながりといったものが少ないのではないかと思います。今回はけっこう文系、文学部の学生が多いと思いますが、文系の学問は密接に理系の学問と結びついているし、逆に理系の学生や研究者・教員もそうですが、理系の学問がいかに文系の色々な社会に結びつくか。最先端の研究もそうですけれども、そういったことも強化していかなければならないのではないかと思います。

《静谷》

◆良いところ

二つあります。どちらも歴史的なものです。

一つは創設以来、「研究第一」を学是としている点です。研究第一という言葉はとても誤解されやすいのですが、研究以外をおろそかにするという意味ではなく、研究を通じた教育を実施するという教育理念の力強い宣言です。二つ目は、多くの学部・研究科を擁する大規模総合大学である点です。東北大学は時の流れとともになんとなく現在の組織構成になったわけではなく、創設時から研究型総合大学としての整備を目指していました。これは、世界最高水準の知の生産現場では、多様な専門分野の知の交流が不可欠と考えたためです。

◆改善が必要なところ

良いところとして挙げた二つの点それぞれに関係しています。

「研究第一」という標語について、真意を理解せず、文字列の皮相的な解釈だけで研究活動を行っているかのような事例が散見されます。一方、これは東北大学に限ったことではないのですが、専門分野のさらなる細分化が止まらない傾向にあります。せっかく総合大学であるにもかかわらず、この傾向は社会的な文脈を反映したテーマ駆動型の学際研究の障壁になり得ます。まずはどの分野の研究者も、自分の研究内容を非専門家に伝えるための言語をもっと鍛える必要があると考えています。

《日笠》

大学では途方もない数の研究が行われており、そのうちよく知っているのはほんの一部に過ぎませんが、近い分野における成果を紹介すると、例えば地球内部で発生するニュートリノを世界で初めて測定した実験があります。これは、地熱の発生源が、地球内部の放射性元素の崩壊によるものか、あるいは地球が形成されてから次第に冷却しているためのものなのか、という問題に手がかりを与えるものです。また、ニュートリノ振動という、ニュートリノの種類が変わる現象の研究では、ニュートリノとその反粒子である反ニュートリノの振動の仕方に差があることを初めて示唆した実験があり、これは宇宙に物質は存在するが反物質が存在していないことに関係する結果です。

さて、メディアでは研究成果を報じる際には「〇〇大学が」という言い方をされますが、実際には大学は研究をサポートする立場で、どういう研究をするようにという指示をするわけではなく、研究は個々の研究者がその興味関心に基いて行っています。小規模の大学では、絞った分野に集中して特色を出そうとしているところもありますが、東北大学は規模も大きく、広い分野の研究をカバーできます。研究のサポート体制も比較的整っていますが、外国の研究者・学生に対する英語によるサポートにはもっと充実させていく余地があります。

日本の大学では講座制を取っているところが多く、研究室を教授・准教授・助教で構成して、チームとして運営されています。東北大学は今年国際卓越研究大学に唯一採択されましたが、計画では若手の助教も自分で研究室を率いることを可能にする新しい制度を提案しており、これが進めば今以上に新鮮なテーマの研究を発展させやすくなります。欧米の大学と比較すると、新任の研究者に手厚いサポートを行っていたり、研究者の給与が能力・業績によって大きく異なっていたりで、日本とはかなり違いがあります。一概にどちらがよいということでもありませんが、今後欧米のよい所を取り入れていくことが期待されます。

.....

Q2：問芝先生に質問させていただきたいです。

1点目に、死後供養から生前供養に変化していく中で、島全体の死生観はどのように変化していったのでしょうか？非常にデリケートな問題ではあると思うのですが、「送られる側」の意識がどのようなものであるのか気になりました。

2点目に、神津島において個々人とコミュニティの繋がりはどのように変化したのでしょうか？念仏婆さんがいた時代は葬送儀礼は島、あるいはコミュニティ全体のものであったものが今は家族葬が増加するなどより内輪のものになったと理解いたしました。その一方在宅介護・看取りを地域の人が協力して行うなど、前よりも繋がりが密になったのではと思われるご発言もありました。そのあたりについて、詳しく伺いたく存じます。

どうぞよろしくお願いいたします。

A：

【問芝】ご質問ありがとうございます。

「死後供養から生前供養へ」は、かつて別の研究会での口頭発表で使ったことがあるフレーズで、何かご覧になってご記載くださったのかもしれませんが、その後思うところがあり今回は使っておりません。神津島も本土の例に漏れず家族は縮小し、高齢化も進んではいますが、「家族を中心としつつ地域全体で死者を送る」「送ってきたのと同じように送られる」という従来の死生観や地域の紐帯をなるべく変えないために、現在の看取りシステムが作られ維持されていると私はとらえています。